

すこやか体験奮闘記

平成12年度大分市は、小・中学校を対象に「生きる力」を育む「すこやか体験活動」に取り組むようになりました。資料館PRのための学校訪問をすると、体験活動の受け皿として、資料館への期待の声が多く寄せられました。

6月、今までの社会科見学を中心とした資料館から体験もできる資料館作りの第一歩がスタートしました。館長以下全職員による「体験とは」の試行錯誤の数々を一部再現すると…。まずは、火起こしに挑戦！ビデオを見たり、本で探したりして、やっと材料がそろそろ。毎日のように資料整理室の中からドリルやのぎりの音。煙はでるが、ほくちに火がつかない。なぜだ。失敗の日々が続きます。道具ももぎり式、弓ずる式、弾み式と進化していきます。「火がつかんと焼き肉も食べれんな〜」「昔の人の知恵はすごかったんやなあ〜」と感心の声がありました。

いよいよ6月23日、明野東小学校3年生68名を迎えるの第一回体験活動がスタートです。前日まで3年生に挑戦してもらおうと準備した火起こし体験、あんどんを使った明かさ体験、麦の穂を使っての千歯抜き体験と限られた90分の中で3つの体験チャレンジ。煙は出るがなかなか火がつかない火起こし体験。疲れてあきてしまう子ども、煙にむせびながら最後まで火をつけようとがんばる子ども、暗やみの中に浮かぶあんどんの明かりにワーと歓声をあげる子どもたち。麦の穂をもち千歯抜きで踏ん張る子どもたちの顔を見ていると失敗を重ねながらがんばったかいがあったかなとスタッフの顔にも満足感があふれていました。

これから多くの学校が、昔体験に挑戦してもらるように歴史資料館はがんばります。

●編集後記

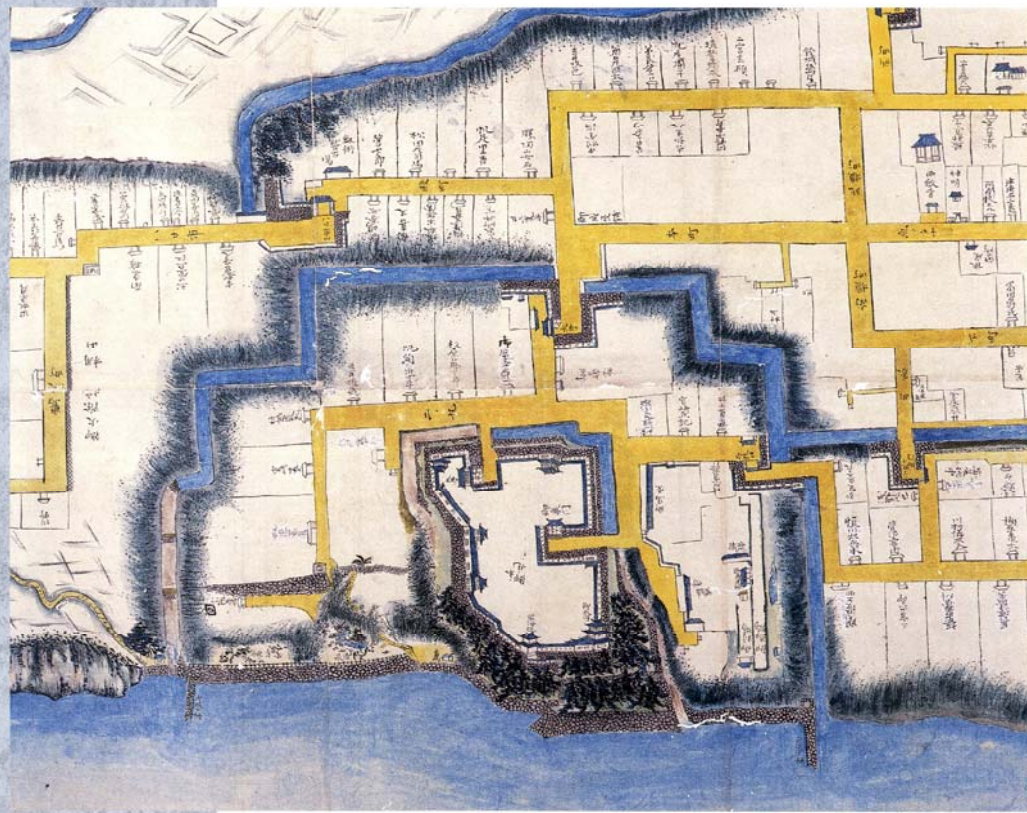
「すこやか体験活動」を受け入れるために始めた火起こし。トピックで紹介したように初めは職員でもなかなか火が付きませんでした。日ごろは煙たがられている喫煙者の100円ライターが神々しく見えたことか。試行錯誤の結果、今では完璧に起こせるようになりましたが、悲しいかな道具がきちんとそろってないと、まだまだ無理です。「もし、無人島に行くなら100円ライター」、これが率直な感想です。(H.O)



明野東小3年生から届いた感想文

資料館ニュース No.51
発行 2000.7.31

大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870-0864 ☎(097)549-0880



日出城下町絵図・部分(当館蔵)

ひし 日出城下町絵図

今回紹介する日出城下町絵図は、当館が平成4年に購入した資料です。購入資料のため故事伝来については判明していません。

絵図の大きさは、多少の凹凸はありますが274×166cmで、約38×27cmの料紙を31枚貼合わせ各々に番号を振ってあります。現状では10、11、15、16、20、21の6枚分が欠損していますが、全体としてはほとんど影響がありません。絵図の範囲は、南は別府湾、東は弁才天（現在の日出駅西側付近）、北は現在の国道213号線北側付近、西は松屋寺から大仏・天満宮までで、城下町絵図といってもその周辺部も含んでいます。絵図は日出城を中心に、神社仏閣まで立体的に丁寧に描き込んでいます。

日出城は慶長6年(1601)、入部した木下延俊が同年秋に築城にかけ、翌年8月に完成したとされています。城は、南は崖で別府湾に接し、二ノ丸は堀を東西北側に巡らし、北(大手門)と東(三ノ丸口門)に内柵形の門があります。本丸も同じく三方向に堀をめぐらし、南側天守閣付近は数段にわたって石垣が積まれています。本丸には大手門(北側)、御裏門(東側)があり、いずれも内柵形をなしています。南東隅に三層天守閣をおき、その西に二階櫓(望海楼)、そのほか城壁の折れに4基の二階櫓があり、それら天守閣・門・櫓を渡櫓・土塀で繋いでいます。

城下町の武家屋敷群には名前が書き込まれており、三ノ丸の八日市口門からはいった所に帆足里吉(万里)の名前が見られます。町屋は街路(町名)のみで人名の記入はありません。

以上のように本絵図はたいへん優れているのですが、残念ながら年号の記載がなく作成年代は判明しません。しかし、絵図には神社仏閣や藩士の名前が丁寧に書き込まれており、それを手掛かりに制作年代を推定する事ができます。絵図に描かれている事で、年代の判明している事象は、以下の7点です。

①元禄年間以降 八日市口門から西が編入される。

簀戸口に門と塀、松屋寺口に門。

②1703(元禄16)年 若宮八幡宮楼門(隨身門)造営、俊長。(楼門あり)

③1800(寛政12)年 日出浜間屋敷東海岸埋め立て、家が立つ。(埋め立て済)

④1801(享和元)年 魚ノ店に神明社を創祀。(魚ノ店に神明社あり)

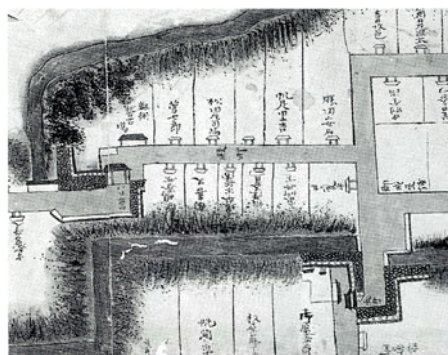
⑤1803(享和3)年 帆足万里(里吉)中ノ丁に宅を賜わり、家塾を開く。(中ノ丁(殿町)に帆足里吉の屋敷あり)

⑥1804(文化元)年 帆足万里 藩学教授を命ぜられ、邸内に学舎一棟を立。稽古堂と称す。

⑦1810(文化7)年 帆足万里 中ノ丁より三ノ丸に移る。

以上の点よりすれば、本絵図は享和3年から文化7年(1803~1810)の7年間のいずれかの時点で描かれた事を示しています。これらの文字・書き込みに後世の修正加筆の痕跡は認められませんが、最大限その危険性を考慮して、中ノ丁の帆足万里宅が後で描き込まれた可能性を考えれば、寛政12年(1800)まで遡る事は可能です。何れにしても、1800~1810年の極限られた時期に限定する事が可能です。

(全体図と部分図を4~5Pに掲載しています。)



殿町の左から2軒目に「帆足里吉」の名前がみえる

府内藩と豊後鶴崎

会期 4月29日(土)~6月25日(日)

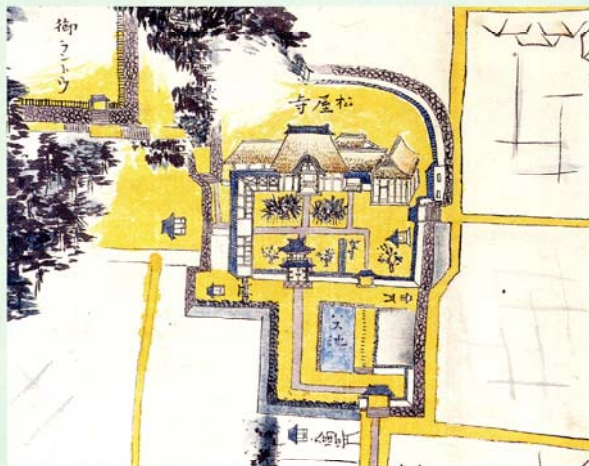
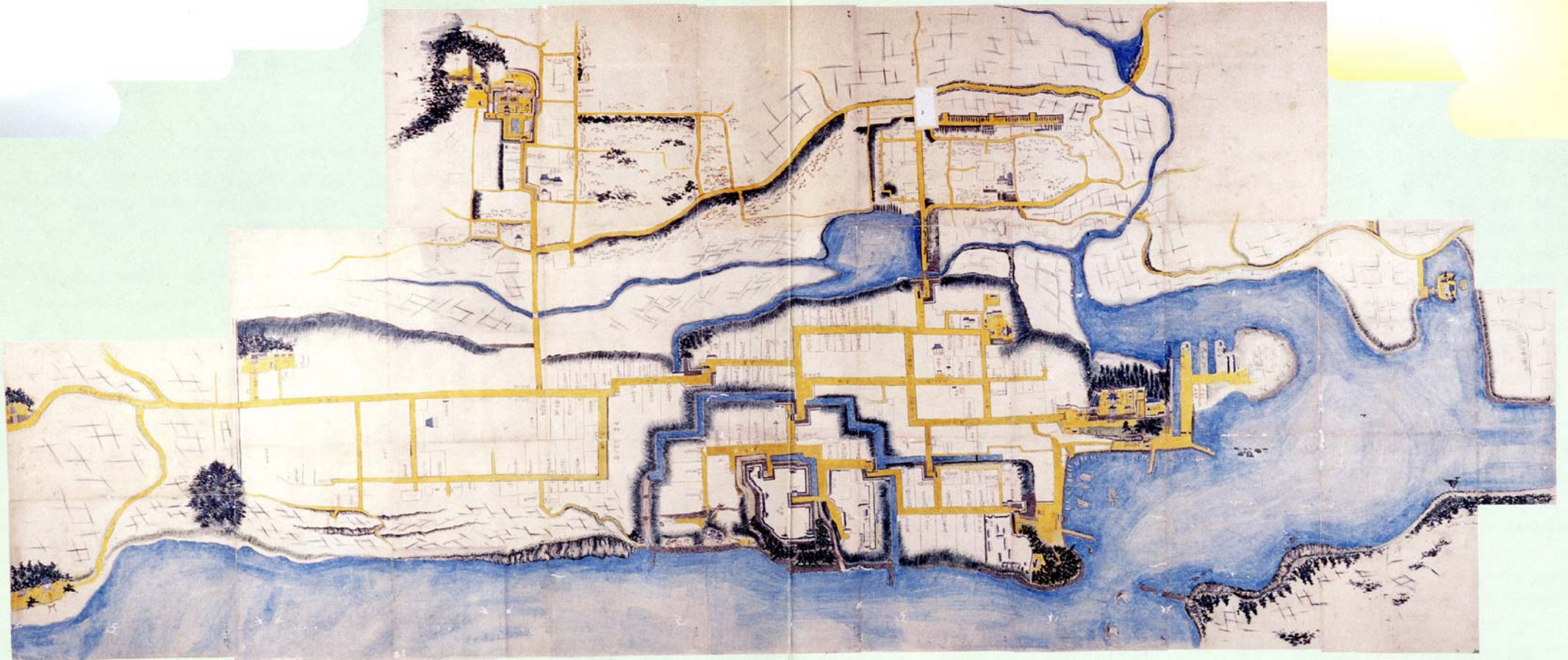
市内を流れる大分川の河口にあって豊後最大の城下町を有した府内藩。同じく大野川河口に位置し、肥後藩の参勤交代のための港が置かれた豊後鶴崎。本テーマ展示では、江戸時代の両地域の歴史を、大名家にまつわる資料や遺品などから紹介しました。**府内藩と大給松平家** 文禄2年(1593)の太閤吉統の改易後、豊後国は豊臣秀吉の直轄領となり、秀吉は側近たちを大名に取り立てて入部させました。府内には翌文禄3年に早川長敏が大分郡内に1万2000石の領地を与えられて入り、府内藩が初めて成立します。その後、福原直高(12万石)、早川長敏(2万石)、竹中重利-重義(2万石)、日根野吉明(2万石)と、約70年間に四家・6人の藩主交代がありました。明暦2年(1656)閏4月、日根野吉明の突然の病死により、同家は断絶。代って大給(松平)忠昭が、万治元年(1658)4月15日に大分郡高松(現大分市。当時は小路口と呼ばれた)から府内城へ入りました。忠昭は当初、丹波国龜山2万2200石の城主でしたが、家督を継いだ翌寛永11年(1634)に豊後国亀川へ移封となり、その1年後に、同領内の大分郡津留(現大分市)に移転、館を構えました。しかし、大分川沿いの低地で水害を受けやすかったことから、寛永19年(1642)に再び領内の高松へ移転しています。そして、約17年間におよぶ高松居住ののち、府内に移ることとなったのです。以来、

明治4年の廃藩置県まで、10代、約220年の間、大給家が府内藩2万2000石を治めることになりました。大給家は、杵築藩の能見松平家と並んで、豊後の譜代大名として重きをなし、参勤交代では、どちらか一方の藩主が国許に留まるように決められていました。

肥後藩領豊後鶴崎と細川家 豊後鶴崎は、関ヶ原の戦いの戦功により慶長6年(1602)徳川家康から肥後熊本城主加藤清正へ与えられました。これは、瀬戸内海に開けた港である同地を清正が望んだからといわれています。同年、船入場の開鑿・造営が行われ、また参勤交代のための藩士の宿泊施設である「御茶屋」の普請も行われたといえます。清正の跡を継いだ加藤忠広は、寛永9年(1632)6月、反逆の意図をとがめられ改易。代って豊前小倉城主であった細川忠利が肥後54万石の城主として入部します。このとき、加藤氏が領した鶴崎をはじめとする豊後領(2万石余)もそのまま細川氏に与えられました。細川氏時代の鶴崎は、豊後における肥後領の中核地として各種機関や施設が「御茶屋」内外に置かれていました。鶴崎は肥後の川尻とともに藩の船方の根拠地とされ、藩士の御座船「波奈之丸」以下、百余艘の船が繋留されていました。とくに鶴崎の船手衆は、同地定詰藩士の8~9割を占め、肥後細川藩の船方の主力をなしたといわれています。



日出城下町絵図



松屋寺



八幡宮



日出城本丸

		(20)	(15)	(10)					
		(21)	(16)	(11)					
		25	22	17	12	7	4		
	28	26	23	18	13	8	5	2	
30									1
	29	27	24	19	14	9	6	3	
31									

日出城下町絵図料紙配列 (括弧内は欠損番号)

みやその 大字宮苑の石造物調査

資料館では一昨年度から中世の賀来荘域にあたる大分市大字賀来・中尾・東院・宮苑を対象にした調査を行っています。今回は大字宮苑に残る石造物について報告します。

大字宮苑は、賀来荘内の構成単位であった千代丸名の所在地であり、字千代丸の近くで発掘調査により発見された鎌倉時代末から室町時代の建物遺構は、荘園の関連施設ではないかと指摘されるなど、賀来荘内でも重要な地区です。また、一昨年度当館が行った水田の用水経路調査では、宮苑のほとんどの水田は大規模な灌漑用水にたよってなく、地区内を流れる小規模な川や谷水を給水源としていることがわかりました。このことから耕地のあり方はかなり古い時代までさかのぼり、大字宮苑は賀来地区の中でも一番中世の景観を残している可能性が高いと考えられます。そこで、中世にさかのぼる情報を求めて、石造物の所在確認調査を行ったのです。

その結果、7カ所で中世の五輪塔約10基と板碑2基を確認できました(下図参照)。確実に中世の石造物であるのは①の板碑の1基で、「元弘第三 仲冬下旬 敬白」との墨書があります。これは元弘三年(1333)11月下旬に書かれたことを示しています。また、この隣に立っている板碑も形式的に南北朝時



大字宮苑 中世の石造物所在地

代から室町時代の建立と考えると間違いのないようです。約10基の五輪塔では年号が書かれたものはなく、多くは当初の形態をとどめていないのですが、形式は中世のもので、大字宮苑に隣接する大字東院でも確認調査を行ったのですが、字板川原にある板碑(下図②)以外中世の石造物は確認できず、宮苑での多さが際立ち、同地区の重要性が再確認できます。

石造物から宮苑地区の歴史を考える時、注意しなければならないのは、特に五輪塔の所在地です。五輪塔は中世には供養塔や墓石として建立され、その場所は集落の周辺にあたる山林や河川の近くであることが普通です。しかし、宮苑地区の場合、個人の宅地内に残っているものや、明治時代以降にできた新しい墓地にまもられている塔があります。これらが建立当初からその場所にあったのか、移動されているのなら、元の場所はどこなのか残念ながらはさきりしていません。これが判明すれば、中世の景観復元に一步近づくことができるでしょう。

まだまだ、解明すべき課題は多いのですが、大字宮苑は中世賀来荘の姿にさかのぼるさまざまな鍵情報を最も多く残している地区であることは間違いありません。



① 「元弘第三」銘の板碑



⑤ 字千代丸の五輪塔



⑧ 寄せられた五輪塔

「忠昭公、従高松府内江御入府行列次第」

本史料は、大給(松平)忠昭が府内藩主に任ぜられ、万治元年(1658)4月15日に旧領の大分郡高松から豊後府内へ入部した時の行列の内容を書き留めたものです。末尾の記述によれば、このときの行列は「騎馬」44騎、総勢991人を従えたとあり、表1は、その内容を順にまとめたものです。これによると、上記「騎馬」は、知行高50石以上の武士(府内藩では50石以上の知行取りを「給人」と呼んだ)からなり、それぞれ若党や草履取り、鍵・具足箱・扶箱などを持った従者を従えており、「騎馬」1騎当り、6~34人(平均16.4人)で構成されていたこと

がわかります。また、このうち、100石以上の者に限って鉄砲・弓などの飛道具が特物として見え、知行高に応じた身分的指標の区別もうかがえます。このように、本史料は当時の大給松平家の家臣団編成を知る上で大変興味深い内容のものです。

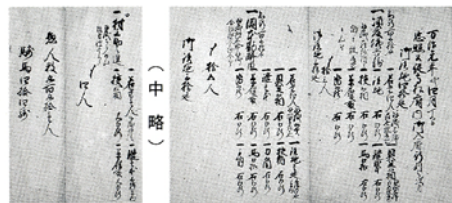


表1

	知行高	馬口扣乗馬	鉄弓	弓	盾	貝足	袷箱	袷箱	その他	記載された騎数	知行高	馬口扣乗馬	鉄弓	弓	盾	貝足	袷箱	袷箱	その他	記載された騎数				
1	御鉄砲									40	74	太田三右衛門	100石(御座)	1		①	4	1	1	1	10			
2	須藤備兵衛	150石	1	1		2	4	1	1	1	13	75	酒井数馬	100石	1		1	2	1	1	2	9		
3	御鉄砲									30	76-77	御馬3疋(中村善左衛門歩行行=馬)→御馬掛1疋(口扣1人・寄籠1人)										9		
4	岡本勘解由	150石	1	1		1	4	1	1	1	15	78	松平木之助	500石	1	5	①	7	1	1	1	5	31	
5	御鉄砲									30	79	竹山庄兵衛	200石	1	2		2	4					16	
6	芝田清右衛門	150石	1	1		1	3	1	1	1	20	80	木村又三郎	200石	1	2		2	5	1	1	3	17	
7	御弓									30	81	岡本主膳	300石	1	2	2	2	8	1	1	1	11	33	
8	手嶋善太夫	150石	1	1		1	5	1	1	1	17	82	酒井七兵衛	250石	1	1	①	7	1	1	1	5	18	
9	御長柄									50	83	田上図書	200石	1	1	2	5	1	1	1	1	17		
10	杉浦善左衛門	150石	1	1		1	3	1	1	1	12	84	岡本勘右衛門	100石(御座)	1	1		2	4	1	1	1	3	14
11	御旗									5	85	中山弥市右衛門	150石	1	1		1	5	1	1	1	4	16	
12	須藤八郎右衛門	20石(隠居料)	2			1	3		2	1	8	86	石川市郎兵衛	150石	1		1	5	1	1	1	2	13	
13	岩瀬三郎右衛門	150石	2		1	1	4	1	1	1	13	87	井出九郎右衛門	150石	1	1		1	3	1	1	1	11	
14	吉田治右衛門	100石	2		1	2	1	1	1	1	8	88	渡辺市郎右衛門	100石	1			1	3	1	1	1	9	
15	佐藤彦太夫	150石	1	1		1	3	1	1	1	12	89	真木権左衛門	100石	1		1	2	1	1	1	1	8	
16	八嶋三左衛門	100石	1		1	1	2	1	1	1	10	90	片野弥左衛門	100石	1		1	2	1	1	1	1	8	
17	木戸洪右衛門	200石	2	1		2	4	1	1	1	15	91	真野弥兵衛	50石	1		1	2	1	1	1	1	7	
18	平田惣左衛門	100石	1		1	2	1	1	1	1	13	92	伴四郎太夫	100石	1		1	2	1	1	1	1	8	
19	岡本八郎左衛門	200石	1	1		4	1	1	1	2	13	93	佐藤小左衛門	50石	1		1	2	1	1	1	1	8	
20	上原長右衛門		1	1		2	1	1	1	1	10	94	三輪市兵衛	50石	1		1	3	1	1	1	11		
21	御持筒									10	95	岐部善左衛門	100石	1		1	2	1	1	1	1	8		
22	木村庄右衛門	150石	1			1	4	1	1	1	13	96	杉浦茂右衛門	50石	1		1	1	1	1	1	7		
23	御持弓									5	97	橋口十郎右衛門	50石	1		1	1	1	1	1	1	6		
24	渡辺清兵衛	250石	1		1	2	6	1	1	1	18	98	寺村作之丞	50石	1		1	1	1	1	1	8		
25-26	御矢籠・御持籠									12	99	佐々新兵衛	50石	1		1	2	1	1	1	1	8		
27	御成番 落合藤右衛門	150石	1	1		1	3	1	1	1	13	100-111	100(小姓中小姓衆掛) 岡本惣兵衛...111田中助兵衛									46		
28	尾崎新五右衛門	100石	1	①		1	4	1	1	1	13	112	太田忠右衛門	1	3		1	7	1	1	1	12	34	
29-72	29乗掛馬...70御乗物...72行列歩行者笠持									70	113-114	大岡一村上助之進											9	
73	岡本治郎右衛門	150石(御座)	1			1	3	1	1	1	12	合計											924	

※表内の数値は員数。太字は騎馬および藩主忠昭の乗物